

名前の意義の指示－依存的な解釈の一展開 ——McDowell から Evans へ——

A Development of a Reference-Dependent Interpretation of a Name's Sense:
From McDowell to Evans

池田さつき
IKEDA Satsuki

要旨 名前が（Frege 流の）意義をもつと見なすことは、しばしばそれが内包や記述的意味の類をもつと見なすことであると考えられてきた。John McDowell は、この考えに強く反対し、我々に必要なのは意義の理論として利用可能な指示の理論のみであるとする指示－依存的な意義解釈を提示する。けれども、本稿の筆者の見る限り、彼の意義解釈は、任意の名前の正しい指示はいかにして決定されるのかという問題を棚上げし、そうした正しい指示の存在をいわば前提として意義の、つまりは理解の理論を与えることを含意する。本稿は、そのような前提に依存することなく意義を指示－依存的に解釈することは可能でありまたより望ましいことを論じたうえで、McDowell の定式化した意義解釈の基本的な枠組みを継承しつつそれを独自に展開した Gareth Evans の意義解釈がまさしくそうした要請にこたえていることを示し、指示－依存的な意義解釈の一つの展開の道筋を跡づける。

1

「名前に意義を帰属させることは、必ずしもそれに内包や記述的意味の類を帰属させることではない……」¹

この一節が示唆するように、名前に（Frege 流の）意義を帰属させることは、しばしばそれに内包や記述的意味の類を帰属させることにほかならないと考えられてきた。引用した McDowell の論文は、そうしたいわゆる記述的な意義観が言語理解の構成契機としての意義を名前に認めることの必然的な帰結ではないことを論じ、代わりに「指示が何であるかを述べるある特定の述べ方によって意義が示される」という図式を採用して「存在論的に安全な」意義の新しい見方を提案したものである。この提案はのちに、頭書の主張に共鳴する Evans へと引き継がれてさらなる展開を見るが、興味深いのは、自説のその種の展開を McDowell 自身は終始忌避したことである。本節では、まず、名前の意義についての McDowell の所論を、その基底にあって彼にこうした態度をとらせた独特の信念と併せて素描する。

意義とは何かについて、その提唱者である Frege はさまざまな、時に相容れない事柄を述べている。例えば、名前の意義は、「その指示の与えられ方」であるとししばしば論じられるが、この特徴づけは多義的であり、我々は複数の仕方でこれを解釈することができる²。McDowell は、こうした Frege の多様な言説のうち、記述的な意義観を導くものを

退け、文の真理条件ならびに文構成要素の真理条件に対する寄与を意義と見なすものを意義の中核的な特徴づけとして採用する。そして、こうした特徴づけと Tarski の真理理論、およびそれを転用した Davidson の真理条件的意味論とを類比しつつ名前の意義に関して次のような独自の解釈を提示する。

Tarski の真理理論には、対象言語における直説法の文の各々に対して、それが真となるための必要十分条件を規定する定理が含まれる。そして、それらの定理は、文の諸構成要素に対して意味論的性質を付与する公理から演繹される。一方、Frege によれば、文の意義はその真理条件に存し、また文構成要素の意義はそれが文の真理条件に対して行う寄与にある。McDowell はここで、文の真理条件に対して文構成要素が行う寄与を、定理の導出において公理が果たす役割になぞらえる。そして、ちょうど Davidson がその真理条件的意味論で構想したように、対象言語のすべての文について、その真理条件を表しかつその翻訳であるような文をメタ言語中に見いだすことができれば、そうした文すなわち定理の適切さ——意義理論としての有用性——によって定理がそこから導出される公理についても同様の適切さを主張できると考え、この定理の適切さを前提条件として、「文構成要素に意味論的性質を付与する公理が文の真理条件の導出において果たす役割によって当の文構成要素の意義が示される」のだと主張する。具体的に言うと、この種の公理において、例えば名前「NN」を扱うのは、典型的には

“NN” stands for NN.

という節である。要するに、名前「NN」が現れる文を理解するためには、この名前を直接には含まない他の必要な知識とともに、この節が表している真理を知れば十分だということになる³。

上の節（公理）は一見、名前の表示が何であるかを述べている（「名前に意味論的性質を付与している」）にすぎない。したがって、これさえ知れば名前「NN」の意義の把握＝「NN」の理解が成立するという主張の要点は直ちにはつかみづらいであろう。この当惑を解消するためには、この種の節が何ゆえ名前の意義を示す、すなわち、名前の意義の理論として適切に機能すると言われているのかを正しくとらえる必要がある。まず、問題の節は決して、単に名前はその担い手を指示するという真理を述べることによって名前の意義を示すと見なされているわけではない。また、その右辺に現れる名前は、左辺に現れる名前の引用符を解除したもので常に事足りるわけでも、この節を真とする名前でさえあれば何でもよいというわけでもない。問題は、先述のように、それが真理条件の導出において果たす役割にある。公理は、意義の理論が全体としてそのために構築されているところの目的にかなった定理を導出できねばならず、公理の右辺に現れうるのはこの意味で有用な定理の導出を可能とする名前のみである。そして、McDowell にとって、意義の理論の目的とは、一言で言えば人間を理解することである。彼の言葉を借りるなら、「以前はパターン化された雑音の発出としか記述できなかった……一群のありうる行為に対し、特定の内容をもった特定の種類の言語行為の実践としてこれを報告するような記述を受容可能な仕方と与えること」⁴である。

McDowell はここで、ちょうど Davidson の理論が遭遇したのと同種の問題に突き当たっ

ている。つまり、公理の意義理論としての有用性は上記のように定理のそれによって保証されるものだが、彼の議論はその構造上翻訳や同義関係を前提とすることができないため、人間を理解する、すなわち、相手の行為を理にかなった言語行為の実践として報告するという基準に従って定理の意義理論としての内容的適切さを別途に検証しなければならないのである。McDowellによれば、ある記述（定理）が適切なものとして採用されるか否かは、その記述のもとにおける特定の言語行為の実践が話者のもつ命題的態度に照らして理にかなっているか否かに依存する。また、そこで話者がもつとされる命題的態度は、話者の行為と環境に照らして理にかなったものでなければならない。したがって例えば、

“Hesperus” stands for Hesperus.

“Phosphorus” stands for Hesperus.

という二つの節はいずれも真ではあるが、意義の理論として利用できるのは前者のみである。なぜなら、もし両者をこれら二つの名前を扱う公理として採用すると、例えば Hesperus と Phosphorus の同一性を報告する人の理解を可能にするような記述を定理として導出することができなくなってしまうからである。このことは、名前「Phosphorus」を扱う公理として、むしろ

“Phosphorus” stands for Phosphorus.

を選ぶ根拠になると McDowell は考える。名前に意味論的性質を付与する公理は、そこから導出される定理のレベルでその内容的適切さのテストを通じて言語使用の実践と結びついており、問題の公理が名前の意義を示すという主張は、そこから導出される定理の全体としての適切さによって裏づけられているのである⁵。

ところで、記述的意義観の難点はそれ以前からさまざまに論じられていたかもしれないが、冒頭で触れたように、McDowell が問題の論文でこの意義観を拒否した背景には少々独特の信念がある。すなわち彼にとって、記述的意義観とは、我々の言語行為が意義の知識に導かれているという図式に必ずや結びつくという点で意義の本質を完全に見誤った立場なのである。この信念ゆえに、彼は、名前の理解、つまりはその意義の把握を、上記の節（公理）が表す以上の実質的な内容を備えた知識に関係づけて説明することを一切退ける。しかし、そうした態度がとれるのは、McDowell の意義理論が Davidson の真理条件的意味論の場合と同種のメタ言語の理解を前提としていることと無関係ではない。つまり、理解について、そこで知られている事柄の内容に踏み込むような実質的な説明を与えずに済むのは、McDowell の理論が実は理解を前提としているからであり、一つの見方をすれば単に翻訳マニュアルを与えているにすぎないからである。むしろ、McDowell 自身は、自らの理論を真正の意義理論／理解の理論と見なしている。彼によれば、理解とは、ただ話者のさまざまな振る舞いによって顕現されるしかなく、より原初的な何かに基礎づけて説明できるものではない。よって、意義の理論に許されること、そしてまさに彼が目指していることは、言語をきちんと使いこなせる人が理解という知識状態において非反省的に行っていることの理論的な再構成である。上記の節の知識は、理解という知識状態を反映

するものであって、決して理解を説明するものではないと彼は繰り返し強調している⁶。

だが、意義の実質的な内容について語ることが直ちに McDowell の懸念したような帰結に結びつくとは恐らく言えないであろう。彼は、他者の発話を理解したり自ら何事かを発話したりするのはいかなる理論の知識にも訴えることなく進行する非反省的なプロセスであり、ゆえに、意義の内容に訴えて理解を説明しようと試みることは許されないと主張する。確かに、個々の言語行為は、まさしく McDowell の言う意味で非反省的に行われているかもしれない。しかし、これを事実として認めることと、我々がどのようにして言語を理解するに至ったかを説明することとは区別されるべき問題である。

McDowell の意義理論は、話者の言語行為の記述としてふさわしい定理を導出できることにその適切さを負う関係上、行為の具体的な解釈場面を重視する。そして、そのような場面では、言語行為の遂行過程に意義は介在しないという彼の観察がなるほどの的を射ているように見える。けれども、専らこうした個別の事例に注目してそれに合理的な解釈を与えるだけでは、行為の記述として適切な定理と不適切な定理があることを通じて意義の存在を示すことはできても、言語を理解するとはいかなることかという問題と意義とを直接関係づけるには不十分である。もし、McDowell の方針に従って意義の内容には一切触れないとしたら、そのような意義の理論は、現に言語を理解している他者の行為の合理的な解釈を可能にする限りにおいて理解にかかわる（「理解を反映する」）ものにすぎないことになる。他方、もし我々にとって言語を理解するとはいかなることかという論点に意義を関係づけようとするならば、理解において知られている事柄、すなわち意義の内容に踏み込むようなより一般的な議論が必要になる。そもそも意義を、言語を理解する話者が把握しているはずの知識としてとらえ、言語理解に含まれる事柄を意義理論の第一の考察対象とするのであれば、こうした一般的な議論を正当な理由なく退けることはできないであろう。その種の議論は言語行為の実態を見誤らせる、という McDowell の懸念は正当な理由にはならない。繰り返すと、我々が言語を用いるときにいちいち一定の知識に訴えたりはしないということと、何らかの知識の獲得を通じて言語を理解するに至ったということとは別の問題だからである。

ただし、こう述べたからといって、「“NN” stands for NN」型の公理によって、名前「NN」の意義が示される、という McDowell の主張の要点が覆されるわけではない。この公理が、そこから導出される定理の全体としての適切さを通じて当の名前の意義を示しており、名前の意義を規定するうえで、意義そのものへの言及は不要である、という論点は、たとえ理解に関する一般的な議論の必要性を認めたとしてもやはり有効である。個々の名前の意義は、上に類する公理によって示される、ということと、例えば、以下で見る Evans の場合のように、公理の右辺の名前を決めるために理解に関する一般的考察に訴えることとは決して両立不可能ではない。ただ McDowell は、公理の適切さをそうした一般的な議論によって正当化はしないのである。名前の意義が意義そのものへの言及抜きに定式化できることを示した点で、McDowell は確かに意義理論の新たな展開を可能にしたと言える。だが、彼の構想がいずれにせよ静的な、いわばすでに理解という状態にある人間の適切な観察所見を述べるための理論であったのに対し、Evans は、一方で McDowell の定式化に共鳴しつつ、他方では意義の内容に踏み込むことによって、人間が言語を理解するとはいかなることかの説明、すなわち、理解についての一般的説明を含むような理論へと明らかに

関心を移している⁷。（ちなみに、McDowell が定式化した意義の指示—依存性は、その系として、意義を、物理的対象とも心的表象とも異なるいわゆる第三の領域の存在者と見なす Frege 流の心理主義を本質的に排除する。つまり、その媒体が何らなくとも存在するものとして意義（あるいは思想）をとらえることは、McDowell の定式化を採用する限り不可能である。これは、くだんの定式化の基盤である演繹機構が本来発話の真理条件の導出を目的としている、つまりは発話という意義（思想）の媒体を前提としていることに由来する。思うに、Evans が McDowell と共有する意義解釈の核心はここにあり、そして、そうした心理主義の排除は、そのように本質的に非—心理主義的／客観的／公共的なものとしての意義の把握、すなわち発話の理解が何に存するかを積極的に論じることと決して両立不可能ではない。）

2

いかに表示を決定するか、またその決定をいかに正当化するかは、ある対象言語の文に対してそのメタ言語中の翻訳文をいかに決定・正当化するかという形で、そもそも Davidson が真理条件的意味論を構想したときから理論に対して困難な課題を課してきたと言える。上記の McDowell の理論にしても、表示の具体的な決定方法については、Davidson の理論と類比的に考えられる以上の積極的な事柄を述べてはいない。けれども、先ほど触れた通り、少なくとも Evans によれば、我々が言語理解に至る経緯やそこで知られている事柄への言及抜きにこの問題を解決することは不可能である。つまり、我々が言語を理解するときに知る事柄、意義の内容が、表示を実際に決定しているのである。

ところで、McDowell の理論は全体として表示関係を前提に成り立っており、この関係自体の一般的な正当化抜きには支持しがたい立場であるという批判は、実は McDowell 自身の予期していたところである。

「真理理論内部における演繹は、文構成要素に対して意味論的性質を付与する公理から……文に対して真理条件を付与する定理へと進む。……こうした演繹の方向を見ると、そこから演繹が始まるところの意味論的性質ならびに関係の本性が別途に説明されない限り、この構造全体が土台を欠いたまま宙に浮いているように思われるかもしれない。したがって、真理理論そのものよりも概念的に先んじて、……名前が何かを表示するとはいかなることかを一般的に説明する必要があるように思われるかもしれない。……だが、この必要性は見かけだけのものである。……我々は、当該の演繹機構（特に表示関係）についての必要な理解を、理論の演繹方向を反転し、解釈における有用性というその帰結に対して要求される事柄の理解から出発することによって得ることができる。我々は、名前が何かを表示するとはいかなることかを、文に対する真理条件の受容可能な付与の導出に際して名前が何かを表示すると述べている言明 [= 公理] が果たす役割を把握することによって把握する。……表示の付与の究極的な正当化は、言語の解釈とは別途に得られるような、対象と名前の発話とを結ぶ何らかの因果関係ではなく、……当該の表示の付与を用いて文の総体に与えられる解釈の受容可能性にある」⁸

適切な意義理論は意義の実質的な内容を語るようなものではない、という McDowell の信念がこの一節からも読みとれる。彼にとって、名前の表示の正当性は、当の名前に表示を付与する公理から導出される諸定理が解釈対象の諸々の行為を最も一貫性のある理にかなった言語行為の実践として記述されることで保証され、それ以上の正当化を本質的に要しないものなのである。しかし、このような仕方でも問題に対処し、表示関係についての一般的な説明を与えていないために、例えば、そこで言及されている「表示」が、厳密な意味で述べられたこと (what is said) にかかわる概念なのか、それとも念頭にある思想 (the thought in mind) を基準に決定されるべきものなのかといった重要な点が判然としない。もし、前者の意味における表示が問題となるならば、話者の行為を理にかなった言語行為の実践として報告するという上記の原則との間に頻繁に生じるであろう乖離をどう処理するのだろうか。また、もし後者が決定要因としてより重視されるのだとしたら、そのようなものを言語の理論の対象とすることが許されるのだろうか。

この点に関して、McDowell はいずれにせよ前者の立場をとらざるをえないであろう。というのも、上記の定式化に照らせば、名前はその担い手 (表示) を欠くと原理的に意義を欠くことになり、ゆえにその場合、たとえ主体がいかにか詳細で確固とした思想を抱こうとも、当の名前を用いた主体の発話はいかなる思想をも表現しえないことを McDowell は主張しなければならないからである。彼によれば、こうした空なる名前を含む発話を解釈する際、解釈者は一般に「自分は「透明な仕方」で記述できるような信念をもっている」と発話者が信じていることをその発話から推測し、そうした推測に基づいて発話者の振る舞いを理解する。しかしこれは、名前がきちんと表示を備えている場合に、その名前を用いて発話を行った主体に対してまさしく透明な仕方でも記述できる信念を帰することによって相手を理解することとは根本的に異なる。つまり、前者の場合に主体の行為を理解可能にするのは、「自分は透明な仕方でも適切に記述できるような第一階の信念をもち、それを表現している」という主体の誤った第二階の信念である。そして、この第二階の信念は、主体の行動を通じて顕現されるものであり、主体の発話によって表現されるものではない。主体の言葉によっては、いかなる信念も表現されていない。McDowell はこのように、発話者を理解するために記述が用いられる仕方を区別することで、表示に依存する前記のような意義観の堅持に一見成功しているようにも見える。そしてこの議論からは、McDowell の意義理論において問題となる「表示」は、厳密な意味で述べられたことにかかわる概念であるという含意が明らかに読みとれる⁹。

しかしながら、上の議論を、通常の、すなわちきちんと表示を備えた名前を含む発話の解釈に適用することを妨げるものは何もない。つまり、上で言う第二階の信念は、それが空なる名前を含む発話の解釈のみに利用されうること示す格別の論証がない限り、表示の有無にかかわらず、名前を含むあらゆる発話の解釈に利用できるはずである。そして、上の議論に従うと、例えば対象 x の名前であるとは一般に認められておらず、むしろ対象 y の名前として認知されている名前「N」を用いて、けれども明らかに対象 x を意図しつつ行われた発話はどのように解釈されるだろうか。この場合、発話者の振る舞いを理解可能にする記述は、対象 x を含むであろう。しかし、上の議論に従えば、それは結局第二階の信念に組み込まれ、ただ話者の行為によって顕現されるにすぎないものと見なされる。つまり、表示は厳密な意味で述べられたことにかかわるのだから、この場合もやはり、

名前「N」の担い手として一般に認知されている対象 y が表示として扱われることになるだろう。だとしたら、全く問題なく名前が使用されているときでさえ、実は表示の決定と発話者への記述の帰属との間にはそもそも乖離のあることが予期される。一言で言えば、「主体の振る舞いを適切な言語行為の実践として記述することを可能にする」ような公理、という McDowell が当初提起した基準は、公理の適切さと直接には結びついておらず、結局、何ら正当化されていない表示関係が理論以前に前提とされていることになる。

以上の考察が示しているのは、話者の言語行為の理にかなった解釈と見なされるものが常に（厳密な意味で述べられたことという意味での）正しい表示に関する信念や判断を話者に帰することを意味するわけではない、ということである。しかし、もしここで正しい表示として一般に認知されているもの自体が不確定だとしたらどうだろうか。念頭にある思想（the thought in mind）を基準に決定される「意図された指示」——例えば、上の例で言う対象 x ——が言語的に正しい表示と無関係であるように見えるのは、個別の解釈事例に焦点を合わせるからであり、メタ言語における言語的に正しい表示の存在を前提としているからである。これに対し、理論にとっての「意図された指示」の有用性は、Evans によれば、それが言語的に正しい表示の決定に実際に関与していることにある。この「意図された指示」の解明を通じて、Evans は、以下のような表示関係についての一般的説明を提示する。それが、名前の意義の内容に踏み込むものであり、名前の理解に関する一般的理論を表示の決定にかかわらせることを意味するのはすでに触れたとおりである。

「名前の表示の決定には、その名前をある対象を指示する意図をもって使用する我々の実践を考慮することが不可欠である」¹⁰——この見解について Evans がまとめた考察を与えているのが論文「The Causal Theory of Names」([Evans 1]) である。このなかで彼は、適切な表示の理論に至る手段としていわゆる名前の因果説に批判的検討を加え、因果説ならびにその論争相手である記述説双方の論点のなかから上の見解に照らして正しいと思われるものをとり出したうえで、それらを自らの言語観にかなう一つの整合的な理論にまとめることを試みている。その論旨をあらかじめ要約すると、まず、話者と問題となる対象との間に存在するある種の因果的連関を表示の基本的な決定要因と見なす点で因果説は正しい。しかし他方、そうした連関を規定するには、話者がその対象についてもっているある種の知識（「情報」）への言及が不可欠であると見なす点では記述説に軍配が上がる。そして、これら二つの論点は結局「話者は一般に、名前の使用に際して、自らがその名前と結びつけている情報群の因果的起源であるような対象を指示しようと意図する」という主張へと展開され、結論として、そうした話者の実践が表示の決定プロセスの中核に据えられる。ここで、意図された指示を決定するとされている「情報」が意義の内容を構成し、名前の理解の一般的説明において核心的な役割を果たすことになる。

議論はまず、因果説の支持者たちによる記述説批判が正確には記述説のどこに向けられているかを明らかにすることから始まる。Evans によれば、記述説とは一般に

A. ある名前の表示は、話者たちがその名前を用いて何を指示しようと意図するかに応じて決まる。

B. ある話者がある名前を用いて指示しようと意図する対象とは、当の話者によって問題の名前と結びつけられている情報群を構成する記述のうち、その大部分を充足もしくはその大部分に適合するような対象である。

という二つの見解の複合である¹¹。そして、記述説の真の弱点であり、因果説がそれを正しく批判しているのは、Bに含まれている充足（または適合）という概念だと彼は指摘する。名前が話者によって全く普通に使われている際に、その意図された指示ひいては表示が、ただ話者によってその名前と結びつけられている記述群に他の何よりもよく適合しているというだけで、話者の属する社会ならびに文化からは因果的に完全に分離されうると想定するのは理不尽であろう。例えば、実は「Y」という名の人物が「X」という別の名で私に紹介されたとする。私は、このXことY氏との談笑を通じて相手についてさまざまな知識を得る。そして、Y氏と同席しつつ「X氏はいまこの部屋にいる」と述べるとき、充足という考え方に従うと、私は字義通りに真なる事柄を述べたことになってしまう。なぜなら、私が名前「X」と結びつけている知識の充足者はYであり、そしてYはまさにいまこの部屋にいるからである。こうした帰結の理不尽さは、本質的に、表示と話者との間の因果的連関を顧みないことに由来するというのが因果説の支持者の基本的な論点である。Evansとしてもこの点における因果説の正しさに異論はない¹²。

しかし彼は、Aの論点についてはより慎重な議論を展開する。確かにこれが、ミクロレベルにおける表示の決定を想定しているのであれば、ちょうどMcDowellが第二階の信念を用いて話者の理解を試みたときと同様の乖離、すなわち、意図された指示と言語的な表示との乖離という問題は避けられないであろう。だが、言語的レベルでの表示の決定が、はたして因果説の主張する通り、その名前の使用者たちの意図と全く無関係に行われていると考えるのは正しいであろうかとEvansは問う。つまり、ある名前の使用が表示している対象は、その対象から指示保持的な因果的連鎖を辿ることによって決定されるという因果説の見解は、表示をめぐる現象すべてに納得のいく説明を与えられるだろうか。例えば、どれほど時がたち、問題の名前が表示を獲得した経緯から発する因果的連鎖に触れた経験が完全に忘れ去られ、いかに主体が混乱しようとも、依然としてその名前の使用はそれが当初名づけた対象を表示している、というのが恐らく因果説の一つの帰結である。確かに、この帰結を論駁する決定的な論証はないかもしれない。しかし、Evansに言わせれば、そのような表示の概念にはほとんど意味がない。つまり、上のような状況にある主体が、因果的連鎖の起源であるところのその対象をまさに表示しており、同じ名前で名づけられた別の対象を表示しているのではない、と主張することには何らポイントがない、ということである。もはや、主体を差別的にその表示と関係づけるような事柄を主体は何ら述べられないし行えない。これを一般に言語的表示と認めると、厳密な意味で「述べられたこと」という概念には全く興味がもてなくなるとEvansは言う¹³。

因果説の支持者は、こうした話者の事情は言語的表示とは無関係であるし、そもそも問題は名前の表示であって特定の話者が表示するものではない、と述べてこの問題を端的に退けようとするかもしれない。しかし、例えばある名前を使用する人間が一人残らずその元来の因果的連鎖との接触を忘れ、当の名前でもって別の対象を指示する実践がその名前を使用する社会において一般化した場合にも、なおその名前は連鎖の出発点たる対象を表

示するという結論が因果説から生じるとしたら、そのもっともらしさには疑問が感じられよう。この違和感は、因果説には恐らく、表示の変遷という現象を認める余地がないことに由来する。けれども Evans によれば、表示は明示的な新しい命名行為なしに、その名前を使用する人々の実践を通して実際に変遷しうる。ゆえにこの現象は、少なくとも彼にとっては、因果説に対する決定的な反証を構成する。この現象を説明できない以上、因果説もまた、彼にとっては表示の理論として不十分なのである¹⁴。

以上の考察を踏まえ、Evans は自らに対し、「ある表現が何ゆえあるものの名前となるかの説明——名前に対してその表示の変遷を許すような仕方で与えられる説明を素描する」という課題を課す。そして、この「素描」において、まず

1. 一般に話者は、ある名前を発話する際、自らがその名前と結びつけている情報群の支配的な起源であるような対象を指示しようと意図する

という見解を特に「(因果的) 起源」という用語の正確な定義とともに論じ、更に

2. 名前「NN」が対象 x の名前であるのは、ある共同体 C が存在し、
 - (a) そこでは、 C の成員は、 x を指示するために (x を指示する意図をもって) 「NN」を使う手続きをいつでも繰り出せるということが共通知識となっており、かつ
 - (b) 「NN」を用いたどの特定の事例における指示の成功も、この名前が C の成員によって x を指示するために用いられてきたという話者と聞き手の共通知識に依存することが意図され、決して「NN」に埋め込まれている何らかの述語が x によって充足されるという共通知識に指示の成否が依存するとは意図されない

場合であることを論証する¹⁵。

因果説は通常、「因果的起源たる対象」という概念を説明する際、話者が対象に関してもつかなる種類の知識へも言及しない。因果的起源たる対象とは、話者による当の名前の使用から、指示保持的な連鎖を辿ることによって到達される対象である。しかし、Evans によれば、因果説はここで、因果関係の所在を決定的に見誤っている。「重要な因果関係は、問題の対象の状態・振る舞いと話者がもつ情報群との間にあり、その対象がある名前で名づけられたことと話者によるその名前の現在の使用との間にあるのではない」¹⁶。

私がどこかの国の首都を一つ挙げてくれと言われて「キングストンはジャマイカの首都だ」と述べる時、たとえ私にそのことを告げた当人が実はキングストンアポンテムズ (London boroughs の一つ) を指示していたとしても、私は厳密な意味で字義通り真である事柄を述べたのだと言えねばなるまい。しかし、因果説の方針に従って指示保持的な連鎖を辿ることに固執し、話者が置かれている情報状態やそれを決定している周囲の環境を度外視する限り、その論証は不可能であると Evans は言う。我々は、このような場合、何であれ自分にそれを知らせた人物が指示していた対象を指示することも、またそのように理解されることも意図していない。意図された指示はむしろ、ある対象を指示するために当の名前を使用する共同体の実践に依存することを予期されている。我々に対し、いか

なる実践が存在するかを示してくれるのが情報である。我々は、ある名前にいかなる情報が結びつけられているかを当の名前を使う周囲の人々とのやりとりを通じて知り、それらの情報群の因果的起源として問題の名前の表示を知る。そして、自らもまた、そうした情報群の因果的起源を指示する意図をもって当の名前を用いるが、「情報」という種類の知識に特有の性質ゆえに、個々の表示の実践を通して時に名前の表示が変遷するのである。

我々が、ある対象に由来するという意味でのある対象の of 情報（例えば、F という内容をもつ情報）を得る典型的な場合とは、我々が当の対象と、F であるものが存在するという信念をしばしば生み出すような状況下で因果的に関係づけられる場合であると Evans は言う。例えば A 氏は、ギリシャ製タバコを吸うことによって、「A は日本製タバコを吸う」という発話によってその場に居合わせた私が表現するような信念の起源となりうる。この場合、私は、A 氏に由来する（A 氏の of）情報、日本製タバコを吸うという内容をもつ情報を得たと適切に言うことができる。こう論じることの要点の一つはむしろ、情報の内容の充足いかんは、ある対象がその情報の因果的起源であるか否かとは基本的に無関係だということにある。情報は、いかに歪み、時にはその起源たる対象に全く適合しなくとも、当の対象に由来するのである限りその対象の of 情報でありうる。逆に、いかにうまくそれに適合しようとも、上に述べた意味でその対象に由来するのでない限り、いかなる情報も当の対象の of 情報ではありえない。そして、情報のもう一つの重要な特徴は、情報の内容それ自体を規定するためには、その因果的起源たる対象への言及は不要なことである。したがって、例えば上の例における A 氏は、ギリシャ製タバコを吸うことによって、「B はギリシャ製タバコを吸う」という発話で表現される信念を引き起こしうる（むしろこの場合、情報の因果的起源は実は A であるが）。この特徴ゆえに、話者がある名前と結びつけている情報群には、実は複数の対象に由来する情報がしばしば含まれる。そして、話者は一般に、自らが名前と結びつけている情報群の支配的起源であるような対象（より多くの情報をそこから得ているような対象）を指示しようと意図するが、この支配性の変化が共同体レベルで生じることにより、例えば次のような表示の変遷が起こる。

「かぶら」というあだ名の少年 A が故郷のある小村を出て半世紀たったころ、その村に別の男性 B がやってきて住み着く。A が村を出たときのことを覚えている一部の村人たちは、A が帰ってきたものと勘違いして B のことを「かぶら」のあだ名で呼ぶようになり、この用法があだ名の由来を知らない若い村人たちにも浸透する。ここで、もし事実を指摘されたなら、年長の村人たちは、「かぶらはこの村の出じゃなかったのか」ではなく「なんだ、あいつはかぶらじゃなかったのか」と言うだろう。つまり彼らは、このあだ名でもって A を指示しているのであり、さらに言えば A を表示し、「かぶらは……」と述べるときには A について誤った事柄を述べているのである。しかし、こうした年長の村人たちはやがて死に絶え、後にはこのあだ名でもって B を指示する均質の共同体が残される。こうなると、このあだ名は B を表示する名前となる。なぜなら、若い村人たちがこのあだ名と結びつけている情報群は、明らかに支配的に B の of 情報だからである。¹⁷

つまり、もし B に由来する of 情報が継続的に「A は……だ」と表現されるような信念を引き起こし名前「A」に結びつけられるとしたら、「A」の情報群の支配的起源はやが

てBへと移行し、「A」はBを表示する名前となる、ということである。

すでに明らかなように、以上のような表示のとりえ方は、先述の McDowell 意義理論の基本構造、とりわけその記述的意義観の忌避を覆すものではない。そこでは確かに、情報という、対象に関するある種の知識の因果的起源として名前の表示がとらえられているが、繰り返すと、ある情報がそれに由来するという意味である対象の of 情報であることは、当の対象がその情報に適合するか否かとは本来無関係だからである。表示関係についての一般的説明は、名前の意義はその表示を述べることによって示されるという McDowell の構想を補強し、その意義理論としての適切さに一般的正当化を与えるものである。この構想自体について言えば、先述の通り、Evans はそれを明示的に受け継いでいる。（記述的意義観の排除を保証する意義の本質的な指示—依存性を、Evans は本当に脅かさずに済むか、という懸念を以上の議論のみに基づいて完全に払しょくするのは難しいかもしれない。この点に関して、恐らく最も明確に Evans を批判しているのが Michael Dummett である。[Dummett 1]によれば、我々がある表現の指示をどのような仕方で考えるかによってその意義を説明する Evans の意義解釈は、発話という媒体抜きに思想が存在しうる、つまり、まさしく指示抜きに意義が存在しうるという見解を—— Evans の言説に反して——含意する（例えば、当該の指示について、それを一定の期間にわたって把捉し続ける能力に基づいて考える（指標的表現の場合）、あるいは、一定の社会的実践がその存在を我々に告げるようなものとして考える（固有名の場合）といった説明に現れる「考える仕方」は、原理的に、発話（がもつものとしてしか存在しえない指示）抜きに存在しうるであろう）。ただし、この点に関する Dummett の言説には揺らぎがあり（例えば、[Dummett 2]もまた、Evans の見解は指示なき意義の容認に結びつきかねないと論じているが、少なくともそこには、Evans の議論は不可避免的にそうした容認に結びつくという趣旨の主張は認められない）、また、本稿の筆者の見る限り、Evans は、特別な場合を除き、ある文の発話が思想を表現するためには、常にそのすべての要素表現に指示がなければならない、言い換えれば、ある表現が指示を欠けば当の表現は原理的に意義を欠き、したがって、そのような表現を含む発話は原理的に思想を表現しえないという見解を支持している¹⁸⁾）

[Evans 2]によれば、情報は、実は固有名のみならず、いわゆる指示表現一般の理解を基礎づけている¹⁹⁾。ある指示表現の理解は、当の表現の指示対象であるようなある特定の対象についての思想を抱きうることに存し、この種の思想の把握において、情報は不可欠の役割を果たすとされる。情報への言及が表示を「興味のもてるもの」にするのも、つまるところ、それが我々によるこうした思想の把握と名前の表示とを本質的に結びつけるからである。（言い換えれば、情報とは、McDowell 流の公理によって示される意義の把握が何に存するかを明らかにすることを通じて、理解についての実質的な理論、すなわち、Dummett の二分法で言う顕在的理解についての理論を与えるうえで中核的な役割を果たすことになる²⁰⁾）表示の決定にかかわる限りにおいて意図された指示が問題となる [Evans 1] の段階では、そうした意図の決定要因である情報が上記のような対象についての思想の把握と一般にいかなる関係にあるかは明確ではない。Frege および McDowell に連なる指示—依存的な意義理論の Evans による展開は、この点を扱う [Evans 2] の議論を通じてその最終的な形を初めて明らかにするが、それを詳しく検討することについては他日

を期すほかない。

注

- ¹ [McDowell], p. 145.
- ² 名前の意義は「その指示の与えられ方」である、という特徴づけは、少なくとも 2 通りの（相容れない）仕方で解釈できる。1 つ目は、指示の存在に本質的に依存するようなものとして、言い換えれば、いかなる記述が表現する内容にも本来還元できないものとして意義をとらえる解釈であり、これは、本稿で扱う McDowell および Evans が共有する立場である。もう 1 つの、恐らくより広く受け入れられている解釈は、指示なき意義の存在を認めるような解釈、つまり、本質的に何らかの記述によって表現されるようなものとして意義をとらえる解釈である。本稿の紙幅では意義に関する Frege 自身の議論に立ち入ることはできなかったが、[Evans 3] は、後者の解釈が決して Frege の本意ではないことを Frege 自身の著述に照らして詳細に論じている。
- ³ [McDowell], p. 145.
- ⁴ [McDowell], p. 142.
- ⁵ [McDowell], pp. 146, 161.
- ⁶ [McDowell], pp. 157ff.
- ⁷ Evans が McDowell による指示－依存的な意義解釈を引き継いでいることは、例えば、[Evans 3] におけるそれへの明示的な言及（特に pp. 280–284）に基づいて裏づけることができる。指標的表現の理解を扱ったこの [Evans 3] の議論のうち、Evans と McDowell の意義解釈の 1 つの異同を示すものとして重要なのは、[Evans 3] によれば、この種の表現の意義は、例えば、「“Today is fine” as uttered on d is true iff today is fine」という節（＝定理）によって示される一方（pp. 289–290）、「話者は、普遍量化された諸原理から文の真理条件を文字通り導出するのではなく……個々の特定の文の真理条件を判断するのであり、その際、問題となっている言語の 1 つ 1 つの原子の理解がそれに存すると解されるような複雑で相互に関連しあった諸傾向を行使するのである」（p. 290）とされている点である。つまり Evans は、ある表現の意義は、上記に類する節によって示される一方、そうした意義の把握は我々による一定の傾向性（＝能力）の所持に存すると考えており、また、そのように考えることは、決して意義の指示－依存性を脅かすものではないと見なしているのである（ちなみに、彼によれば、我々が話者に帰属するのは、「today」のあらゆるトークンはそれが発話された日を指示するという一般的な信念ではなく、むしろ、「today」の個々のトークンについて、それは、個々に同定されたそれぞれの発話の日を指示するのだ、という個別的な信念を形成する傾向性である）。これは、本稿の第 2 節以下で見る Evans の議論、すなわち、固有名の意義はその指示が何であるかを述べる公理によって示される——つまり、我々は、指示の理論と別個に意義の理論を求めるべきではなく、また意義とは本質的にそのように指示と切り離して論じうるものではない——と主張する一方、そのようにして示される意義は我々の一定の社会的実践に依存するような仕方で把握される、という議論と類比的に考えられるような Evans の意義解釈の（McDowell にはない）特徴を示している。
- ⁸ [McDowell], pp. 160–162. [] 内は筆者。
- ⁹ [McDowell], pp. 152–154.
- ¹⁰ [Evans 1], p. 11 他。
- ¹¹ [Evans 1], p. 12.
- ¹² [Evans 1], p. 3, pp. 12ff.
- ¹³ [Evans 1], pp. 7–8.
- ¹⁴ [Evans 1], p. 11.
- ¹⁵ [Evans 1], pp. 18ff.
- ¹⁶ [Evans 1], p. 13. 傍点は筆者。
- ¹⁷ [Evans 1], pp. 22–23.
- ¹⁸ [Evans 2], chap. 1, 9; [Evans 3], pp. 284–289. 本文に言う「特別な場合」とは、単称否定存在言明、および言うところの「ごっこ遊び」の文脈である。これらについて、本稿の筆者は、その修士学位論文「エヴァンズ意義理論の再考——ダメットというところの“適切な”意義理論の一試案として——」において、それが Dummett の懸念するような帰結に必ずしも結びつくものではないことを論じた。
- ¹⁹ 正確には、Evans が指示表現に含める各種の表現のうち、「記述名 (descriptive names)」と呼ばれるもののみはいわゆる Russellian status（＝その有意味性が本質的にその指示の存在に依存するという性質）をもたず、ゆえに、その理解は情報の援用を必要としないとされている（[Evans 2], chap. 9）。
- ²⁰ [Dummett 2], chap. 7.

文献

- Michael Dummett [Dummett 1], “The Relative Priority of Thought and Language”, in *Frege and other Philosophers*, Oxford University Press, 1991.
- Michael Dummett [Dummett 2], *Origins of Analytical Philosophy*, Harvard University Press, 1996.
- Gareth Evans [Evans 1], “The Causal Theory of Names”, reprinted in Gareth Evans, *Collected Papers*, Oxford University Press, 1985, pp. 1–24.
- Gareth Evans [Evans 2], *The Varieties of Reference*, Oxford University Press, 1982.
- Gareth Evans [Evans 3], “Understanding Demonstratives”, in Roland Posner, Jacques Bouveresse, eds., *Meaning and Understanding*, Walter de Gruyter & Co., 1981, pp. 280–303.
- John McDowell [McDowell], “On the Sense and Reference of a Proper Name”, reprinted in Mark Platts, ed., *Reference, Truth and Reality*, Routledge Kegan & Paul, 1980, pp. 141–166.